科学研究費助成專業 研究成果報告書



平成 27 年 6 月 1 8 日現在

機関番号: 32614

研究種目: 研究活動スタート支援

研究期間: 2013~2014

課題番号: 25885070

研究課題名(和文)小学校国語科の読みと幼稚園領域ことばの教師の教授スタイルに関する研究

研究課題名(英文)A comparative study on teaching style of Japanese language "reading" at primary school and "Language" at ECEC

研究代表者

吉永 安里 (Yoshinaga, Asato)

國學院大學・公私立大学の部局等・助教

研究者番号:50714721

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文): 幼小移行の円滑な移行を促す幼小の教師の教授スタイルを検討した。日本、アメリカ、ベルギーとの国際比較も行った。日本では、幼小とも集団活動であるが、幼では自己発揮が求められ、小では学習規律、自己抑制を求める傾向にあった、また、小で文字指導が行われる他、言語性の促しレベルは幼小とも変わらなかった。アメリカでは、ともに文字指導が行われ、高度な言語性の促しがなされていた。幼小とも個別活動が多く、自己抑制を求める傾向が強かった。ベルギーも幼小とも集団活動で、幼では自己発揮、小で自己抑制を求めていた。文字指導は小から行われ、言語性の促しは幼稚園は日本の幼より低く、小は同程度であった。

研究成果の概要(英文): My research studied teaching styles by which the teachers promote smooth transition from ECEC to primary school. The research includes a cross-cultural study in Japan, Belgium, and the US. The teaching in both ECEC and primary school in Japan is conducted via group activities, and pupils are expected to demonstrate their abilities more in ECEC than in primary school, where a learning discipline and self-control are prioritized. Teachers' initiations to enhance language capacity are of a similar challenge level at both stages, except that letters are taught from primary school. In the US, letters are taught from ECEC, and the teachers' initiations are of a higher level than in the others. The teaching is on an individual basis and self-control tends to be expected at both stages. Belgium has a similar teaching style to Japan, but the initiations in ECEC are of a lower level than those in Japan while in primary school they are of a similar level. Letters are taught from primary school.

研究分野: 国語教育

キーワード: 幼小連携 言葉 国語 教授スタイル

1.研究開始当初の背景

申請者は以前、幼稚園から小学校へ職場を移った際に、幼稚園教諭と小学校教諭の子どもへの関わり方の違いを目の当たりにし、衝撃を受けた経験がある。そのような教師の関わりを直に受ける子どもにとっては、その違いはなおのこと大きく衝撃的に感じられることであろう。

このような申請者自身の直接的な経験から、本研究においては、幼から小に移行した子どもたちが、教師の子どもへの関わりに大きな不適応を感じるのではないか、それが「小1プロブレム」の原因にもつながっているのではないか、という仮説をもった。

しかし、1990 年代後半からクローズアッ プされ始めた「小1プロブレム」に関しては、 教師の関わりの幼小間の差異よりも、子ども たちを取り巻く社会の変化や、その影響を受 けた子どもの側の問題に焦点が当てられ、そ の改善策として、幼小の子どもの交流やカリ キュラム開発が主な研究対象となってきた 経緯がある。新保(2010)は、「小1プロブ レムとは, 授業不成立という現象を中心に して, 学級が本来持っている学び・遊び・ 暮らしの機能が不全になっている, 小学校 1年生の集団未形成の問題」であり、その要 因として、「 子どもを取り巻く社会環境の 変化が,子どもの育ちを変化させていること、 親の子育ての孤立化と未熟さ、 子どもも 親も自尊感情が低く,人間関係づくりが苦手、

就学前教育と学校教育の段差の拡大、 自己完結し,連携の少ない学校園、 今の子どもにミスマッチの頑固な学校文化や学校教育システム、を挙げている。 で就学前教育と学校教育の段差について言及されているものの、その実態が明らかにされないまま、行政・学校単位でのカリキュラム開発や、小学校生活科に位置付けられる学校間での交流会、あるいは幼小の教員の人事交流といった幼小連携の改善の取り組みについて研究が重ねられてきている。

そこで、本研究においては、新保(2010)が4つ目の要因として挙げている就学前教育と学校教育の段差の拡大、特に教師の子どもとの関わりの段差に焦点を当て、就学前教育と学校教育の実態を明らかにすることで幼小接続のよりよいあり方を探究することとする。

2.研究の目的

本研究では、就学前教育と小学校教育の接続期に起こる「小1プロブレム」について、保育・授業中の教師の子どもへの発言やふるまい、環境設定といった教授スタイルのあり方、教材の取り扱い方の観点から問題点を明らかにする。特に、小学校で最も多く指導時間が取られる国語教育とそこにつながる就学前教育の領域「言葉」の指導における教師の教授スタイルについて詳しく考察することとする。

また、日本だけでなく、世界の幼小連携の あり方と国際比較を行うことにより、我が国 の幼小連携の特徴と改善点をより明確にす る。

その上で、子どもたちが就学前教育から小学校教育へ円滑に接続するための教授スタイルについての提言を行うこととする。

3.研究の方法

上記の目的について、以下の3つの観点から検証を行う。

- (1)幼稚園、小学校の共通教材と言える「おおきなかぶ」の読み聞かせ・授業場面を観察し、その双方の段階の教師がそれぞれどのような教授スタイルをとっているか分析・考察を行う。
- (2)「おおきなかぶ」の教材の取り扱いに関する幼稚園・小学校両教諭の意識の差異を、 双方の教師に作成してもらった部分指導 案の記述から分析・考察を行う。
- (3)世界の幼小連携のあり方と我が国のあり方の国際比較を行うため、アメリカ(コロラド州ロングモント)とヨーロッパ(ベルギー・オーデルゲム)の幼小学校での観察調査を行い、各国教師の教授スタイルについて分析・考察を行い、日本のデータと比較検討を行う。

就学前教育と小学校教育の比較にあたって、本研究では学びの連続性に焦点化し、同じ学校教育に位置づけられる幼稚園と小学校の比較を行うこととした。観察場面も、幼稚園の領域「言葉」の絵本の読み聞かせ場面と小学校国語科「読むこと」の文学的文章の授業場面に限定した。これは、どのような場質の形態が取られることが多くは東一学校の授業と類似の条件下で比較が可能、どちらも主に物語教材を扱っており、特に小学校低学年の教科書教材と幼稚園で読み聞かせされる絵本は共通性が高い、という2つの理由からである。

また、教材の違いによる教師の反応に差が 出ないよう、幼小両校種で共通して取り扱わ れることの多い「おおきなかぶ」を教材とし て選定した。「おおきなかぶ」は、平成23年 度版小学校1年生の国語教科書5社すべてに 掲載されており、ほぼ 100%の小学生が学習 する教材である。また、幼稚園でも、本稿で 観察した小学生への聞き取りでも入学以前 に「おおきなかぶ」を読んだ経験のある子は ほぼ 100%、幼稚園教諭へのインタビューで も、どこかの学年で必ず読み聞かせをしてい るとのことであった。「おおきなかぶ」は小 学校では 100%、幼稚園においても大多数の 子どもたちが接する、幼小共通教材と言える。 調査方法:幼稚園3園7学級、小学校4校5 学級を対象に、幼小両校種の教師が「おおき なかぶ」をどのように扱っているか、その教 授スタイルを検討することとした。分析は、

保育・授業場面のビデオ記録から、教師及

び幼児・児童の発話、ふるまいをトランスクリプトに起こす、 自覚的な学びのための 5 つの力を促していると考えられる教師の関わり(発話やふるまい、環境設定)を抽出する、 抽出した関わりにラベリングし、5 つの力に分類する、 各教師から抽出された関わりの種類やカテゴリーのバラつきを教師の教授スタイルとして記述し、解釈的分析を行うという流れで行った。本研究の(1)はこのうち、言語性に焦点化して考察したものである。

4. 研究成果

本研究では、就学前教育から小学校教育への円滑な接続の在り方について、幼稚園の領域言葉の教育と小学校の国語科の読みの教育に焦点をあて、幼稚園、小学校のそれぞれの教師の(1)教授スタイル、(2)教材の取り扱いに対する意識、(3)教授スタイルの国際比較、の3つの観点から調査を行った。

以下、(1)と(3)の調査結果、(2)の調査結 果について詳述する。

まず、(1)において幼稚園と小学校の教師の教授スタイルを比較し、その共通点・相違点から、子どもにとってのよりよい幼小移行を促す教授スタイルのあり方を検討した。本調査の事例で見られた言語性の促しに関する教師の教授スタイルを、以下、幼稚園は表1、小学校は表2にまとめた。

次に、(3)では、日本だけでなく、アメリカ(コロラド州 B 校)の事例と、ベルギー(ブリュッセル C 校、F 校)の事例との比較も行った。

その結果、日本では、幼小どちらも集団での保育・授業形態であった。幼稚園では自己発揮することが求められ、一方、小学校1年生では集団行動に対する学習規律が優先され、自己抑制を強く求める傾向にあった。しかし言語性の促しのレベルは、小学校で初めて文字の読み書きに関する指導が行われることを除いて、幼稚園とほぼ変わらなかった。

アメリカでは、幼小ともに文字の読み書きの指導が行われ、幼稚園でも日本の小学校 1年生以上の非常に高度な言語性の促しがなされていた。また、幼小どちらも個人での学習活動が主であり、学習規律・自己抑制を求める傾向が強かった。

ベルギーでは、2校で観察を行った。キリスト教系のC校は、日本と同様に幼小とも集団での活動であり、幼稚園では自己発揮、小学校では自己抑制を求める傾向が見られた。幼稚園では文字の読み書きは行われず、言語性の促しのレベルは日本より低かった。また小学校では文字の読み書きの指導が行われ、言語性の促しのレベルは日本の小学校1年生とほぼ同様であった。一方、フレネ式のF校は、幼小ともに集団と個別の活動が半々であった。幼小ともに自己発揮することを求め、言語性の促しのレベルは共に高かった。しかし、文字の読み書きは日本と同様、幼稚園で

数一 幼稚	間の言語性	表1幼稚園の百簡性の教授スタイル	_					
#	教諭名	40A	st)B	stac	≴ D	4¢0€	4 Ú F	stj ie
**	幼稚園	国立附属(年長)	国立附属(年中)	私立U(年中)	私立U(年少)	私立K(年長)	私立K(年中)	私立K(年少)
経験	経験年數(約)	20年(うち小1年)	10年	15年	30年	5年	15年	10年
	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	2012.7.5(降園前)	2012.10.19(お弁当前)	2013.7.2(降園前)	2013.6.25(降園前)	2013.10.17(お弁当前)	2013.10.17(降園前)	2013.10.17(お弁当前)
戦	施州小派	素話	大型絵本(福音館)	総本(福音館)	絵本(福音館)	絵本(福音館)	絵本(福音館)	絵本(福音館)
	内御パターン	- インフォーマル / type Gの応答パターン (手遊びの歌詞の続き) (すりを Mの応答 パターン (かぶの食 ペカーン で方)	- インフォーマル / type Gの応答パ - インフォーマル / type Mの応答パ - インフォターン 手遊びの繋記の続き) ターン (おじいさんの様子) ターン (おけいさんの様子) ケーン (おじがる) (など) (など) (など) (など) (などが) (など)	·インフォーマル/type Gの応答パ ターン (誰が誰をひっぱったか)		- インフォーマル / type Gの応答パ ターン (次の登場人物の予想) - インフォーマル / type Mの応答パ ターン (お話の続き、かぶの食ベ方 の話し合い)		- インフォーマル / type Gの応答パ ターン (次の登場人物の予想)
	酷し方	・フバセきの受け <i>止め</i>	・フぶやきの受け止め	・フぶやき <i>の受け止め</i>	<i>、つぶ'やきの受け止め</i>	・フ·ぶやきの受け止め ・対全体へのパブリックな話し方	<i>፞፞፞፞ጔጜ</i> ፝ቝ <u></u> ≢ <i>ፙቜけ止፟፟፟</i>	・フぶやきの受け止め
# # #	春村の万季	・問 ・動作化(登場人物の行動、かぶの ・動作化(登場人物の行動、かぶの ・語と音節の関係への言及(「お, がつ(本) ・デモラニの伝え合いの見守り ・徒像の世界と現実世界の区別) ・手遊び(事後「こんじん、たまね ぎ」)	間	- <u>翻名の週和</u> - 間 - 胃薬の意味説明(「孫」) - 挿絵の確認(読みの修正) - 全員の劇化(事後/登場人物)	- 個を取らなし - 動作化をしなし。 - 事態が (書庫)でんでんむし。 - ペープサード(事後)野菜スープラ (リ)。 き」並び(事後)にんじん。たまね き」がのけがけ		记 ·	≅∙

-	我 怕	A/I/	4NB	ANC.	ďνD	Эψ
7	小学校	国立附属	国立附属	私大附属	公立K	一口で
	経験年数(約)	10年	20年	10年	35年	(15年(うち幼10年)
F	金田金	2013.6.27 (2時間目)	2013.6.27 (4時間目)	2012.10.11(4時間目)	2013.7.5(2時間目)	(目開目17.12.72]
**************************************	「おおきなかぶ」 の取り扱い方	教科書(教育出版)	絵本 (福音館)	教科書(学校図書)	教科書(光村出版)	(湖早里)
	応告パターン	- インフェマル/ type Gの応答 / (ターン (世界の書話の題名当て、どこの国のお話か、訳者) ・フォーマル/ type Mの応答 / (ケーン (かぶの大きさ)	- インフォーマル (type Mの応答 パターン, フォーマル / type Gの応答 パターン(が近の大きさ) (かぶの大きさ) - フォーマル / type Mの応答 パターン - フォーマル・インフォーマルの混合 / (かぶを抜いたらどうなるか) type Mの応答 / (ターン (「まこ, の意味 / type Mの応答 / (をし) (「まこ, の意味 / type Mの応答 / (*まこ, の意味 / type	()	- フォーマル V type Mの応答 V ターン (もじいさんの様子、もおきな、おおき な、の繰り返しの意味、抜けた時の人物 の気持ち、お店の感想) - フォーマル V type Rの応答 V ターン (おじいさんの気持ち) - 説明の仕方の具体的教示(喩え、ジェ スチャーを使って)	・全員で一斉回答/type Gの応答パ ターン (登場人物と登場順の確認)
•	置し方	・ つぶやきの受け止め ・ 対全体へのパブリックな話し方	・つぶやきの受け止め	・フバやきの受け止め	・対全体へのパブリックな話し方	・つぶやきの受け止め ・ペアでの話し合い(登場人物)
# #	神での日本	- 教師の範読 (子どもは指さし読み) ・ 徐本の読み聞か ・ 暗読 「清読」 ・ 動作化 かぶの大きさ) ・ 下間 ・ 下間 ・ 下間 ・ 下間 ・ 下間 ・ 下間 ・ 大条 に乗り ・ 下間 ・ 下間 ・ 大条 に乗り ・ 下間 ・ 大教材提示 (かぶ) ・ 素物 指示 (かぶ) ・ 教材 提示 (かぶ) ・ 教材 提示 (かぶ) ・ お辞の表現 特性 ・ 全体 での / 上指導 (マスの使い方、書 りた (なっちゃう.) (個別の / 上指導	・絵本の読み聞かせ (授業始め・教師と 途中から子とも、授業終リ:争員) ・教団 ・教祖伝われた板書(色チョーク、矢印) ・お話の表現特性へ気づき (この本ぶ、 しぎだよね、読んでも間にみんなひっぱ リた(なっちゃう」)	・音読 (斉誘) ・音添への肯定的評価 ・暗幅できる子への肯定的評価 ・音流の状況の確認 ・記者の確認 ・全体でのノートの指導 (新しいページ、 マイヌウけ、分かち書き、部分的リート ティキング、 < x の書き方 ・個別のノート指導 ・個別のノート指導 ・のありましたね。それを抜きに来た人 が、おじいさん、おばあさん)	・教師の範読 (子どもに)教科書を見て はいない」と指示) - 代義 (日童の劇化 (登場人物の行動) ・代表 現職の劇化 (登場人物の行動) ・核書	・絵本の読み聞かせ(教師と途中から子 ともも) ・間 ・間 ・町作化(かぶの大きさ) ・量物提示(かぶ) ・長音への気づきの促し(おばあさん、 もばさん) ・ なり 大きないがら、の子どもの発 ・ なり はんはって、そうだね。 いっ子ともの発 ・ これ しゃない できだん はっか、一番目 に出てきた人は?・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

は行われず、小学校のみであった。

以上の結果から、日本では、小学校に上がると、自発的に学ぶ意欲が低減する可能性があると考えられる。言語性の促しでは、幼から小へ適度な段差を設け、自己抑制ばかりを強調するのではなく、自己発揮できる場面も設けることで、子どもの言語性と学習意欲を幼児期から継続して高めていくことが必要であろう。

しかし、アメリカのように、幼稚園から高い言語性を要求することは、子どもに「できない」という不全感をもたらす可能性もある。 実際にアメリカでは、多くの子どもたちが一人では課題を遂行できない状態にあり、先生や TA が学習の補助をして、なんとかやり遂げるといった様子であった。

アメリカのように少人数のクラスで、かつ 学習補助が入り、個別の活動で展開していく 方法でなく、日本のように一斉授業を行う場 合は、全体の活動の中で子どもが取り組み、 達成することのできる発達に即した適切な 促しのレベルを教師が考慮することが重要 であると言えよう。

(2)教材の取り扱いに関しては、幼稚園・小学校の共通教材といえる「おおきなかぶ」の 取り扱いに対する意識調査を行った。

幼稚園教諭に対する調査を終え、現在分析中である。また、小学校教諭に関しては現在調査中である。幼稚園教諭に関しては、「おおきなかぶ」を単に言語性を促す手立てと限定せず、多様な力を総合的に育むことを企図していたものが多かった。また教材を通した学びをその後の遊びや生活と結び付け発展させていく意識があることも明らかとなった。

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に は下線)

[雑誌論文](計 1 件)

<u>吉永安里</u>、 幼稚園・小学校における「おおきなかぶ」の教授スタイルの様相 自覚的な学びを促す教師の関わりに着目して 、 國學院大學人間開発学研究 第 5 号, 2014、pp.81-98.

· [学会発表](計 2 件)

吉永安里、 幼稚園・小学校における「おおきなかぶ」の教授スタイルの様相-言語性を促す教師の関わりに着目して-、 第 128 回兵庫大会研究発表要旨集、2015、 pp.19-22. 全国大学国語教育学会

吉永安里、 幼稚園・小学校における「おおきなかぶ」の教授スタイルの様相:「自覚的な学び」の観点から、 第125回広島大会研究発表要旨集、2013、pp.361-364.全国大学国語教育学会

[図書](計 件)
〔産業財産権〕 出願状況(計 件)
名称: 発明者: 権利者: 種類: 種類: 番号: 出願年月日: 国内外の別:
取得状況(計 件)
名称: 発明者: 権利者: 種類: 種号: 出願年月日: 取得年月日: 国内外の別:
〔その他〕 ホームページ等
6 . 研究組織 (1)研究代表者 吉永安里(YOSHINAGA, Asato) 國學院大學・人間開発学部子ども支援学科・ 助教 研究者番号:50714721
(2)研究分担者 ()
研究者番号:
(3)連携研究者 ()
研究者番号: